

第7回

子どものチカラ
～ 子どもって どう育っていく?～

講師
木村 裕美

子どもは、生まれながらにして優れた感覚機能や、まわりの人との関わりを引き出す力を持っています。この回では、子どもが生まれつき持っている力や、身体と心の発達について学んでいきます。子どもの発達を学ぶことは、自分のこれまでの成長過程を振り返ることにもつながります。きょうの学習を、自分自身をより深く理解することにも役立てていきましょう。

◆◆◆ きょうのキーワード ◆◆◆

新生児の持っている力

生まれてから最初の4週間を「**新生児期**」といいます。母体から離れて、外の世界に生まれ出た赤ちゃんが環境の変化に適応するため、この時期に特有の現象があります。

①生理的体重減少

生後すぐには母乳をうまく飲むことができないので、体重が一時的に減少します。その後、回復していくので心配する必要はありません。

②生理的黄疸

生後3～4日から皮膚が黄色くなる現象のことです。1～2週間で消えます。この現象は、必要なくなった胎児赤血球が壊れるときにできるビリルビンという成分を、肝臓で処理しきれないために起こるといわれています。

③原始反射

赤ちゃんが生まれつき持っている、刺激に対する反射的な反応です。吸い付き（吸啜）反射、把握反射、モロー反射などがあります。

運動機能の発達の方向性

子どもの運動機能の発達は、常に次のステップへの準備が行われながら、順序よく、連続して進んでいきます。全身を使って大きく動く**粗大運動**は「頭部から足の方へ」、手や指を使った細かい動作を必要とする**微細運動**は「中心から抹消へ」という方向性が見られます。子どもが十分に身体を動かせる環境を整えることや、大人が子どもの発達を見守る姿勢が大切です。

memo

言葉の発達

赤ちゃんが泣くことは単なる生理的状态の表現だけでなく、まわりの大人とのコミュニケーションの手段になっていきます。生後5～7か月ごろには「喃語」と呼ばれる、「ア～」 「ブ～」といった音を発し始めます。赤ちゃんの喃語に対してまわりの大人が応答して発声すると、それを受けて赤ちゃんがまた発声するといったやりとりが生まれ、言葉の発達が促されていくのです。

愛着(アタッチメント)

乳児は日々の生活の中で自分を保護し、守ってくれる人を区別できるようになると、その相手に自ら愛着行動を示すようになります。また、特定の相手との信頼感を形成し、この信頼感を基礎にした特定の相手との心のきずなを愛着(アタッチメント)といいます。愛着は子どもが外の世界を探索する際に安全基地の役割を果たすので、まわりの大人の関わりがとても重要です。

1 赤ちゃんの持っている力

なぜ、赤ちゃんはいろいろな力をもって生まれてくるのでしょうか。その理由を考えてみましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....



.....

.....

.....

.....

赤ちゃんが生まれつき持っている能力

原始反射	知覚能力
モロー反射 歩行反射 把握反射 吸てつ反射 など	視覚 聴覚 嗅覚 味覚 触覚 など
	

memo

.....

.....

2 身体・心・遊びの発達

赤ちゃんの身体・心・遊びの発達を促すためには、まわりの大人はどのように関わっていけばよいのでしょうか。自分の考えをまとめてみましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....



3 赤ちゃん和大人の結びつき

愛着とはどういうものなのでしょうか？

また、赤ちゃんが、まわりの大人との愛着を形成していくために、大人はどのような点に注意して接していけばよいのでしょうか。自分の考えをまとめてみましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

きょうのまとめ

子どもの発達を学んで、理解したことや気がついたことをまとめてみましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

わたしたちの未来 ～ SDGs 17のゴール ～

目標3 すべての人に健康と福祉を

今回は、SDGsの【目標3 すべての人に健康と福祉を】について、日本で生まれた「母子健康手帳」が世界30か国以上のお母さんや子どもたちが健康的な生活を送ることができるよう、サポートしている話を紹介します。

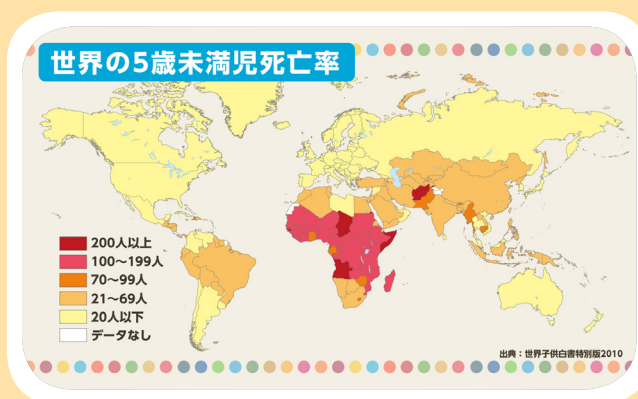
みなさんは自分の母子健康手帳を見たことがありますか？「母子健康手帳」には、母子の健康状態や赤ちゃんの成長を記録するための手帳です。妊娠から幼児期までの健康記録を一冊で管理することができます。母子健康手帳の特徴は、記載された健康記録を保護者が管理できること、たとえ医療機関を途中で変更しても引き続き利用できること、利用する側と保健医療サービスを提供する側のコミュニケーションを円滑にすること、母親や父親の知識を深めたり、行動変容を促す健康教育教材など、さまざまな役割を担っています。最近では男性の育児参加を促すための「父子手帳」も配布されています。

この母子健康手帳、実は日本発祥の制度です。母子健康手帳は第二次世界大戦後の1948年に誕生しました。戦後の日本の乳児を取り巻く保健医療水準は劣悪な状況でしたが、現在は世界でも最高の水準に達しています。しかしながら、世界に目を向けてみると、5歳未満児死亡率が1000人あたり50人を超える国がいまだに数多くあります。そんな中

で日本の母子健康手帳が注目され、現在では世界30か国以上で導入されています。まずは必要なときに適切な保健医療サービスを受けること

ができる制度を整え、健康的な生活を送れるように支援していくことから始めています。その制度の中で母子健康手帳は大いに役立っているのです。

健康的な生活を送ることができるかどうかは、国によって、また人によって大きな差異があります。そして、その差異が生まれる背景は実にさまざまです。すべての人が健康的な生活を送ることができるようにするために、私たちは何ができるのか考えていきましょう。



《参考文献》SDGs (国連 世界の未来を変えるための17の目標) 2030年までのゴール (企画・編集/日能研教務部 発売/みくに出版)

このページ掲載の文章・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。